

谷津干潟での市民参加型底生動物調査について

Public participation for researching benthic invertebrate organisms inhabiting in Yatsu Tidal Flat

○馬渡 和華・荒尾 一樹・芝原 達也・小山 文子 (習志野市谷津干潟自然観察センター)

・大原 庄史 (NPO 法人生態教育センター)

・風呂田 利夫 (東邦大学理学部東京湾生態系研究センター)

Kazuka MOTAI, Kazuki ARAO, Tatsuya SHIBAHARA, Fumiko OYAMA (Yatsu-Higata Nature Observation Center), Masashi OHARA (Center for Ecological Education) and Toshio FUROTA (Tokyo Bay Ecosystem Research Center, Toho University)

moutai@wildlife.ne.jp

東京湾最奥部に位置する谷津干潟は 1971 年に行われた埋め立てにより、周りを囲まれたが保護活動によって残され、1993 年にラムサール条約に登録された。その後、大学や研究機関による底生動物の調査が行われてきた。しかし市民が参加する調査はイベントとして単発で開催されるのみで、継続したものはなかった。谷津干潟自然観察センターでは 2017 年より継続的に調査を開催したので、これまでに得られた結果と市民参加型調査の有用性について報告する。

調査は 2017 年 10 月 15 日、2018 年 11 月 3 日、2019 年 7 月 15 日の 3 回にわたり実施した。2017 年の調査地は干潟南部で、2018 年、2019 年は干潟の南東部で行った。どちらの地点も高潮帯で、底質は砂泥質である。調査は一般公募および、観察センターのボランティアや観察センターで活動する小学生から大学生の学生 30~39 人で行った。40~50 分の間、目視またはスコップ、バケツ、ふるいを使って地面を掘り返して底生動物を集めた。参加者には、採集する生物種は 1 種につき 1 個体までとし、できる限り多くの種類を採集するよう伝えた。採集した底生動物は観察センターに持ち帰り、参加者とともに同定を行った。

調査の結果、全 47 種の底生動物を確認した。各年で見ると 2017 年で 9 種、2018 年では 23 種、2019 年は 35 種となった。本調査で発見された底生動物の多くは谷津干潟で過去に確認されている種類であった。オサガニ、チゴガニ、オキシジミなど千葉県レッドリストに掲載されている底生動物が計 11 種類確認された。多くの人の目があることでまんべんなく干潟を探索でき、その結果発見種数が増えたと考えられる。

本調査では市民が干潟に触れ関心を持ち、現状を知る機会を得るだけでなく、ボランティアや学生が複数回参加することで、調査に関する人材育成や生物同定の技術向上を図ることができた。今後も調査で情報を収集し、底生動物相の経年変化を知るとともに、市民が主体的に実施できる調査手法の開発に努める。

キーワード：東京湾、絶滅危惧種、干潟、底生動物、市民協働